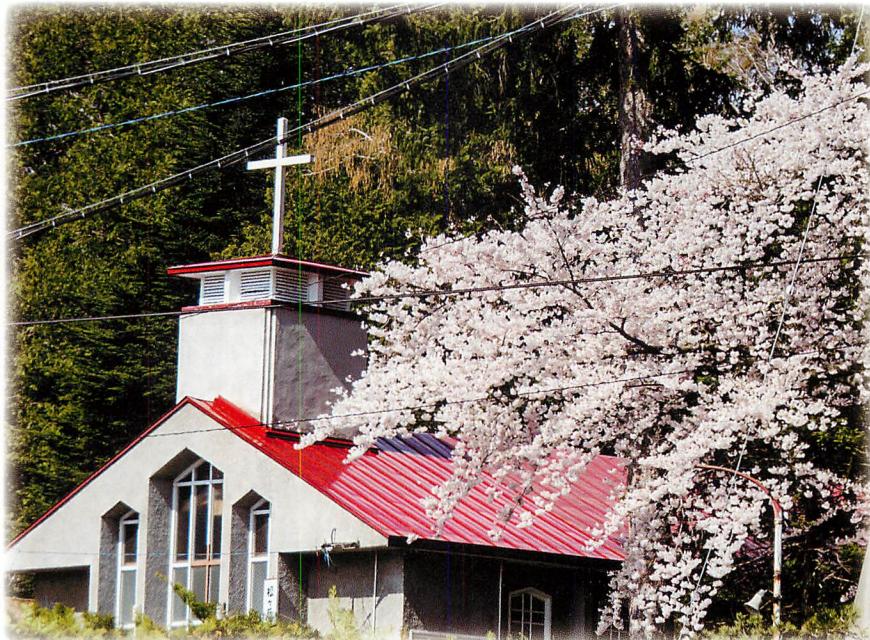


甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2020

3号

通巻702号

松丘保養園の機關誌

離任式（令和2年3月31日）



川西健登園長 退官



「川西先生、看護師さん、お疲れ様でした。ありがとうございました。」

「青葉かがやく」贈呈 感謝状授与式（令和2年3月30日）



松桜会刊行 根岸章歌集「青葉かがやく」250冊を青森市教育委員会を通じて市内の小・中学校へ寄贈。松桜会・石川勝夫理事長より小野寺青森市長へ目録を贈呈。青森市からは感謝状が授与されました。

甲田の裾 令和2年3号 通巻702号 目次

松丘での8年余を省みて、みなさまへの感謝

.....国立療養所松丘保養園 前園長 川 西 健 登 … 2

就任のご挨拶 国立療養所松丘保養園 園長 横 山 慎 … 10

新任のご挨拶 福祉室医事係長 滝 川 哲 弘 … 16

新任のご挨拶 治療棟看護師長 佐 野 美 香 … 17

川西園長の退官に寄せて

.....ヒューマンライツふくおか 理事 藏 座 江 美 … 19

Sさんのことなど 三 浦 康 久 … 23

詩 歩いている 木 村 全 十 … 30

川柳・俳句 木 村 伯 龍 … 32

ひとが結ばれるということ 笠 原 俊 典 … 33

第16回 思い出食堂

懐かしの『こびり』 笹餅とあつたか汁の郷土料理

..... 看護助手 工 藤 幸 子 … 37

社会交流会館だより 社会交流会館 学芸員 澤 田 大 介 … 41

人事異動 43

自治会日誌・編集後記 44

表紙写真：「2020 桜とカトリック教会」盲人会 横濱明美

写真提供：福祉室

松丘での八年余を省みて、 みなさまへの感謝

国立療養所松丘保養園 前園長 川 西 健 登



この度の新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の状況下、いろいろな制約の中で生活しておられる入所者のみなさま、感染防御のために日夜ご苦労なさっている横山慎園長先生をはじめ職員の方々にお見舞い申し上げます。

松丘で勤務させていただいた八年余を振り返って、最も大きな恵みはご苦労にご苦労を重ねて遙かな歳月を辿られ、深い思いを内に秘めておられる入所者のみなさまとの出会いでした。そして入所者のみなさまをとおして、そのご家族、かつて松丘で生きられた物故者の方々、職員の方々、新城、青森の地域のみなさま、全国から松丘のことをお心に掛けてくださっている方々、とてもひとつひとつ挙げることのできないほどのお会いに恵まれ、得難い学びの機会、感性を呼び覚まされ、魂に触れる経験を与えていただきました。お世話になつた入所者や職員をはじめ、すべてのみなさまにこころから感謝を申し上げます。

私は去る四月初めに帰阪してからずっと自宅で反省や整理の申し訳ないような毎日です。ちょうど札幌の工藤正廣先生からご惠贈いただきましたご高著「郷愁、みちのくの西行」を読み進めていく中で、これは中世一一八七年、平泉から京へ帰る歌人西

行の見守りを命じられた中尊寺の労務僧であるタケキヨが、京を往還する困難な旅の中で西行にまみえ、その歌とみちのくへの想いを深めていくという物語ですが、松丘での経験と重なることばがたくさんあって深い示唆を与えられました。

松丘の人々

私事で恐縮ですが自宅に籠つていると台所に立つ機会も増え、さて昼食はとなると田中春男さんがチャーハンをお好きだったことを思い出して時々作ります。小豆島のオリーブ油を使ってサラダ感覚で作る人参チャーハンは玉葱、ピーマン、卵と彩もきれいでとても美味しいです。閑話休題。田中さんのご実家は四国八十八か所の遍路道にあり、母上はほんとうにやさしく気持ちのいい方で巡礼者を親身になつて接待され、子供の田中さんも母上から教えられたように家に廻つて来た巡礼者の袋にお米を一握り入れてあげたそうです。そういう巡礼者の中にハンセン病患者さんが混じっていたことを田中さんのご家族はご存じでした。田中さんは父上と同様ハンセン病を発病し松丘に来て浜野あや子さんと結婚し昨年春に相次いで召されるまで仲睦まじい生涯を送られました。その間、ご実家に里帰りして母上と三人で養鶏を営みながら一年余り暮らしたことが最も幸せで誇りに思うと話されました。しかしそこでどうしても田中さんの足の裏傷の治療を続けることができず保養園への帰園を余儀なくされました。ご夫妻もお母様もどんなに残念だったことかと思います。途中、大阪駅のホームで人目を避けて新聞紙を敷いて二人で傷の手当てをされたという話を思い出すたびに胸が詰まります。ハンセン病の患者さんが療養所以外で治療を受けることが困難であつた当時の不条理をあらためて痛感します。ただ一方で田中さん浜

野さんご夫妻は松丘にとつてもなくはならない方でした。果樹を栽培し、畑を耕し、療友を自主的に園外のレクレーションに引率するなど、様々の活動で療友を助けつつ園外の人々との交流にも貢献されました。

「郷愁」でみちのくの奥地への視察旅行から帰つて来たタケキヨに「生きていくことの懐かしさと悲しみをもつと耕そうではないか」ということばがあります。ご夫妻は松丘で実際そのように生きられたのだと思います。そしてこれは田中さん浜野さんご夫妻についてですが、松丘の入所者お一人おひとりについて想い起こすと尽きることはありません。松丘を離れた今あらためて思うのですが、松丘の入所者のみなさまはご家族と故郷から離れて大変なご苦労を重ねつつ「生きていくことの懐かしさと悲しみを耕された」方々であつたのだと、自由と人権を抑圧されながらも、こうろ豊かな生涯を送られたのではないかとそんな気がするのです。

ことば

「郷愁」で山寺の老僧が「若いタケキヨ殿、あなたも歌の一つくらい詠むというでなくば、一生が水の泡ともなりかねんがんせ。どこに自分の心を残すのだ?心がことばとなり、そのことばがまた人々の心になる。となれば、歌も仏心も同じこととなるのではないかな。詠みなさい・・・」と歌を勧め、寺男は「歌はことばだ、ことばは心だ、人は心で生き死にする。生き地獄でもがいていながらでも歌によつて生きる杖を持つ」と言います。これらのことばには根岸章さんや滝田十和男さんから遠く武田牧泉ら白樺短歌会の創始者の方々に遡る多くの入所者が歌作を生きる糧しながら療養所での困難な生涯を全う

した姿が髪鬚とします。またここで言う「歌」は川柳、俳句、詩、散文、歌唱など短歌以外のことばによる表現にも通じるはずです。たとえば太田三八さんが親友の茅部ゆきをさんと助け合つて川柳を詠まれたことは確かに句作を生きる杖とされたことを示しています。「甲田の裾」には入所者が生きた証としての夥しいことばが溢れています。さらに老僧がいう「ことば」は、とりわけそのような創作として発表されなくとも、入所者が日常生活で何げなく話されたことばにも通じるのだと思います。

私たちは日常何げなく語られる入所のことばを真剣に聞くことをケアの重要な基本のひとつとしてきました。私は今回離任の前に在任中に亡くなられた六十五人の入所者のうち五十八人については不十分ながらそのカルテに目を通すことができました。目を通して言つても自分が記載した部分が中心で、とてもすべてを読むことはできませんでしたが、その場その時の状況が思い起こされ、あらためて反省させられたり、新たな課題を見いだしたり、とても勉強になりました。同時に普段カルテを充分に読み返せていなかつたという反省を強くしました。特に患者さんご自身のことばの記録は貴重で、カルテを読み返すことは私にとってそこでその患者さんと再会することに等しいと思いました。

診療録の整理、編集

このような観点から、過去の診療録は単に保存するだけでなく常に立ち還つて読み返し活用できる形で系統的に整理、編集されていることが必要不可欠です。平たく言

えはダンボール箱に詰めて置くのではなく少なくともファイル化が必要ということです。昨年度に物故者の診療録で未整理であつたものについての系統的な整理と編集を、前任の福西征子先生がなさつていたことを踏襲し、看護課が中心となり全職員のご協力で集中的にしていただきました。ハンセン病を発病し入所してから亡くなるまで数十年以上の診療、看護、介護の記録は膨大で、記録の多い入所者は厚手のファイルが優に十冊を越えます。

そもそも患者さんの病態を評価し治療を計画するにあたって病歴はその重要な基礎になります。同様にケアプランを作成するためにはその患者さんの生活史の理解が不可欠です。松丘保養園には明治四十二年に前身の北部保養院が創設されて以来のカルテが不完全ながら保管されています。このようなハンセン病療養所のカルテは診療、看護、介護、福祉の記録を含み、一般の医療施設のカルテには見られない重層的な内容の厚みと時間的な幅を有しています。それは長い年月の中で入所者と多職種の職員の関りによつて作成された歴史的遺産です。これを個人情報の保護を最優先しながら必要な時にはいつでも見直せるよう系統的に整理保管することは、何よりも物故者の人としての尊厳に敬意を払うことであり、医療施設としてのハンセン病療養所の歴史的な責任です。まだまだ不十分なところもあり今後デジタル化の推進を検討する必要もあるかと思いますが、職員のみなさまにはまずそれぞれの目的意識を持つて過去の記録を読み返すことをお勧めします。とにかく全職員の努力によつて、医療施設としての松丘保養園のアーカイブズの核となるべき過去の診療録の形を整えることができたことを感謝しています。このカルテは松丘保養園の誇りです。

継承と供養

「郷愁」に山寺に滞在中のタケキヨが貧しい山里の子供たちに文字を教え、歌を暗唱させて教育していく場面があります。老僧は「歌のことばは、死に切りではないでがんす。引き継ぐものらがあれば、千年でも残る。あるいは再生するのでがんす」と言います。保養園ではハンセン病問題の啓発教育において入所者との直接的な交流を重視してきました。その交流には入所者が残した作品を読んだり、短歌を暗唱したり、語られたことばを記憶して伝える、そのような形があることが示唆されています。ここにはハンセン病問題を知識として学ぶことなどまらない、百年千年先にも生きる真の継承への希望があると思います。歌を含めてさまざまな形で表現された入所者のことばこそは最高の歴史的遺産です。問題は、私たちが入所のことばを本気で引継ぎ、語り継ぐか否か、その覚悟如何なのだと思います。昨年度末に弘前大学人文学部の先生から学生のハンセン病の実習で白樺短歌会の歌を学ぶ計画があると伺いました。とても素晴らしいことで是非実現させていただきたいと思います。このためにも検索機能をつけた「甲田の裾」をネット上で読める環境を早期に構築する必要があります。

老僧はさらに「供養の心を終生忘れないことも人の心じや。歌とても畢竟、供養といふべきでがんす。この世の生きとし生けるものの供養でがんす」と言います。入所者のことばを継承することは眞の供養に通じるのではないでしようか。前述の診療録についても、医療従事者にとってカルテを書いたり読み返したりすることは供養に繋がるのだと思います。だからこそ日々の記録を疎かにしてはならない、これは私自身

の反省としてあります。

桜、樹木、環境

五月も早下旬になりそろそろ松丘の八重桜の季節も過ぎた頃でしょうか。八重桜は舞姫、天の川、高砂、御衣黄等々、多様な種類がその名のとおりそれぞれに美しく個性的です。かつて入所者のみなさまがここに生きられた証と感謝の印として植樹を始められた尊い志を受け継ぎ、樹木医の逢坂淳さんのご指導で始められた松丘の森プロジェクトの一環として、これらの八重桜は二〇一五年から入所者のみなさまが保育園児や地域の方々といつしょに植樹されたことが思い出されます。二〇一六年に社会交流会館の東側一帯に植樹された「松丘百本桜」はそれぞれ植樹された入所者のお名前が記録に残っています。松丘の樹木はそこにじっと立つて保養園の営みを見てきた存在で、入所者のみなさまにとつては一本一本の樹に思い出があります。逢坂さんは松丘の樹々を入所者のご家族のように大切にお世話してくださいます。

しらかば町会の三野亜沙子さんに工藤正廣先生から贈られた「伽羅松ノ画譜、伽羅松の丘に立ちませ海見ゆるかも」を紹介されたことと、ランドスケープ（景観）デザイナーの廣瀬俊介先生との交流が契機となつて「風景にはそこに生きた人々の魂が宿る」ということに気づかされたのもその頃でした。それから定期的に廣瀬先生との話し合いを重ね、入所者のみなさまの記憶と一体となつた松丘の樹木、自然環境全体をそのままの形で保全していくためのグランドデザイン構想に繋がっています。

反省

八年余を省みると元々園長の器ではない私でしたから、あらためて自らの至らなさを思い知ることがたくさんあります。デスカンフアランスの記録から自分の発言を読み返しても、これでは不十分で亡くなつた入所者に申し訳ないというところが多々あります。反省は尽きません。入所者や職員のみなさまには寛容によく我慢していただいたと思います。感謝とともに、お詫びしなければいけないこともあります。この間、六十五人の入所者の他に三人の現職の職員の方々、事務長補佐の大角さん、看護師の北上さん、清藤先生が亡くなられたことは衝撃でした。いずれも保養園に大きな貢献をされた方々で、大変難しい病態でしたが、知らないところで無理をしていただけいたのかもしれません。園長としては申し訳なかつたという思いがそれぞれの方に対してあります。あらためてご冥福を祈らせていただきます。

敬愛する根岸章さんに「療園に勤めし日日を誇りとし健やかにあれよ見送りて佇つ」という歌があります。私も松丘保養園で八年余、勤務させていただいたことを誇りとし、みなさまとのお交わりでいただいた経験をかけがえのない宝として、今後も一人の医師として研鑽に励みたいと思います。重ねてありがとうございました。

みなさまどうぞおいのちを大切になさつて長生きしてお元気でいてください。ご多幸をこころから祈ります。

就任のご挨拶



国立療養所松丘保養園 園長 横山 慎

令和二年四月一日をもちまして、国立療養所松丘保養園の園長を拝命いたしました横山慎でございます。当園は明治四十二年の開設以来百十一年目となる長い歴史と伝統のある施設で、責任の重さに身の引き締まる思いがいたします。もとより微力ではございますが最善を尽くしてこの重責を全うする所存でございます。前任者同様格別のご厚情を賜りますようお願い申し上げます。

入所者の皆様、日頃松丘保養園の運営にご協力をいただいている多くの皆様、職員の皆様、改めましてよろしくお願い申し上げます。

平成二十九年四月、私が副園長として松丘保養園に赴任してから早いもので二年経ちました。初めてのハンセン病療養所での勤務でしたが入所者の皆様をはじめ、前園長の川西健登先生、職員の皆様にご指導を賜り多くのことを学ばせていただきました。心より感謝申し上げます。

松丘保養園では多いときで八〇〇名以上の入所者が療養生活を送られていらっしゃいましたが、現在は五十八名と大変少なくなり、平均年齢は八十六・八歳と高齢化してきてお

ります。入所者の皆様の多くは末梢神経障害に伴う手足の障害や視力障害などハンセン病の後遺障害に加え、高齢化に伴い身体機能に低下をきたし、様々な疾病を抱えながら日々の生活を送られています。医療・看護・介護のますますの充実が求められる次第です。

医療については弘前大学医学部各科より医師の派遣など全面的なサポートをいただいており、入所者の皆様には常に最新・最善の医療を提供できるように体制を整えております。また青森県立中央病院を始め青森市内の多くの医療施設と連携し、各診療科の専門医による医療を隨時受けることができるよう努めております。しかし喫緊の課題としましては、松丘保養園の常勤医師が現在は園長のみの一名であるという大変脆弱な医療体制の改善が求められていることがあげられます。日常の診療はもとより緊急時の対応などについては課題が残るところです。また、自己研鑽のための学会参加はおろか園外での会議や会合への出席も憚られるような状況です。出張中の留守を守る医師がないからです。常勤医師の確保は今後の重要な課題の一つです。

入所者の皆様は末梢神経障害に伴う手足の変形や視力障害などのハンセン病の後遺症に加え、高齢化に伴い認知機能の低下や、脳梗塞や脳出血など脳血管疾患の後遺症や腎疾患、肝疾患、虚血性心疾患、誤嚥性肺炎や間質性肺炎などの呼吸器疾患などを複数併発されているかたも多く、加齢に伴う基礎体力の低下も伴い不自由度が増してきております。

看護・介護については知覚・感情・言語による包括的コミュニケーションに基づいたケア技法であるユーマニチュード技法や認知症ケアのための環境整備のガイドラインであるPEAPP(Professional Environmental Assessment Protocol)など最新の技術を取り入れ、入所者の皆様の看護、介護に取り組んでおり、その成果が徐々に現れてきております。今後も最新の理論や手技を積極的に取り入れ、看護・介護のよりいつそうの充実をはかつて参りたいと考えております。

入所者の高齢化に伴う問題の一つとして避けて通ることができない大きな問題があります。それは終末期に関する問題です。多くの入所者の皆様が高齢化あるいは病状の悪化などから近い将来終末期を迎える機会が増えてくると思われます。

そこで提案されているのがアドバンス・ケア・プランニング(ACP)＝人生会議という取組です。

入所者の皆様の将来の変化に備え、将来の医療及びケアについて、入所者を主体に、そのご家族や近しい人、医療・ケアチームが繰り返し話し合いを行い入所者の意思決定を支援するプロセスです。入所者の人生観や価値観、希望に添った将来の医療や介護を具体化することが目標となります。人生の最終章を如何に生き、如何に最後の時を迎えるのか。治療を継続するのか中止するのか。治療を継続する場合はどの段階まで頑張るのか、あるいは中止する場合はどのような状況で中止を決定するのか。もしものときのために入所者の皆さんのが望む医療やケアについて前もって考え、家族や友人あるいは医療や介

護の担当者と繰り返し話し合い、共有する取組が必要となつてきます。

この取組はまさしく松丘保養園の理念と基本方針（表1参照）に100%合致するものであります。

- ・苦しい治療を頑張つても良くなる見込みがないのであれば、これ以上治療を続けたくない。

・家族との時間を大切にしたいのあと一年生きたい。なんとかならないか。

・人工呼吸器はいやだけど胃瘻の造設は許容する。でも、やっぱりどちらもいやだな。

・今まで苦労したので長生きしてもらつと人生を楽しみたい。可能な治療はすべて受け入れる。

いろいろの状況が想定されます。またその時々の病状の変化に伴いその時の思いも変化すると思われます。常に入所者の皆様の考え方や気持ちの変化に沿つた医療や看護、介護を提供できますよう努めて参りたいと思います。

最後に新型コロナウイルス感染症について

松丘保養園では春夏秋冬いろいろな行事が企画されておりますが、やはり高齢化の影響で年々参加される入所者のかたが少なくなつてきております。毎年企画されている「高齢

者「バスレク」も昨年から参加を希望される入所者が少なく休止となりました。そのような折り今年は春から全国的に新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、青森県内でも感染者が徐々に増加しております。不要の感染拡大を避けるため園内、園外に限らず多くの交流の機会が少なくなつてきております。春の「観桜会」や「歌謡交流大会」をはじめ多くの定番の行事が中止となりました。地域にお住まいの皆様との交流の機会となつております。「夏祭り」の中止もすでに決定しております。

園内の行事だけでなく青森県を代表する弘前市の「弘前さくらまつり」や入所者の皆様が毎年観覧を楽しみにされている、青森市で夏に開催される「青森ねぶた祭り」もすでに中止が決まっております。このように園内外での交流やふれあいの機会が少なくなり引きこもりの生活が長くなりますが身体能力の低下はもとより、知らず知らずのうちにストレスが蓄積し精神的なダメージも大きくなりフレイルの発症などにつながりかねません。

過度な自粛、萎縮ムードは避けたいとは思いますが、新型コロナウイルス感染症から入所者の皆様の健康をお守りすることが何よりも優先されるべきことだと思います。

入所者の皆様には大変なご不便をおかけしますが、ご協力のほど宜しくお願ひ申し上げます。

この原稿が「甲田の裾」に掲載される頃には、新型コロナウイルス感染症が収束しておりますことを祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

国立療養所松丘保養園の理念・基本方針

理念

私達は、入所者一人ひとりが歩んだ道のりと生命の尊さを深く認識し、地域の人々と共に歩む、豊かで心安らかな療養環境の提供に努めます。

基本方針

- 1 安心で信頼されるチーム医療を提供します。
- 2 入所者の個々に応じた医療・福祉に努めます。
- 3 快適な生活環境を提供し、療養生活の充実に努めます。
- 4 入所者の社会参加に対する支援に努めます。
- 5 入所者の名誉と権利を尊重します。
- 6 職員の教育・研修に努めます。

国立療養所松丘保養園入所者の皆さんの権利

本園は、療養所の理念と医の倫理に基づき、入所者の権利を尊重します。

- 1 松丘保養園で、自らの意思に基づいて療養生活を受ける権利
- 2 人としての尊厳を保ちながら、良質の医療・福祉・介護を受ける権利
- 3 十分な説明と情報提供を受け、自らの意思で治療法などを決定する権利
- 4 個人としてのプライバシーを保護される権利

新任のご挨拶



福祉室医事係長 滝川 哲弘

この度、令和二年四月一日付人事異動により国立病院機構函館病院より赴任いたしました。滝川哲弘と申します。よろしくお願ひします。

私は幼少の頃より父親の転勤で北海道各地を転々とし、中学二年生より千葉県で過ごしてきました。

青森は三十年程前、小学生の修学旅行時（当時函館の小学校に在籍）において一度訪れていました。青森の港に建設されたばかりの「巨大な三角形のビル」に一同驚かされたことを覚えています。また、奥入瀬溪流も当時のコースに入つており、深緑の森の中に非常に多くの滝が並んでいたのが強く印象に残っています。

私は病院業界としては、国立病院機構道北病院（現旭川医療センター）からスタートし、帯広病院、北海道がんセンター、函館病院で勤務し、現在に至っております。

各施設では診療費の料金計算にかかる「医事」で勤務することが多かつたのですが、松丘保養園では国の機関であることから診療費の考え方が全く初めてで、その他にもユマニチュードという考え方や「福祉室」という入所者さまに直接接するという環境もあり、一から勉強しながら勤務しております。

ハンセンの歴史を学び、入所者さまに寄り添えるよう励んでいきますのでよろしくお願ひします。

新任のご挨拶



治療棟看護師長 佐野美香

この度、四月一日付けで国立病院機構青森病院から昇任して参りました、治療棟看護師長の佐野美香と申します。どうぞよろしくお願ひ致します。

出身は津軽鉄道ストーブ列車の終着駅があり、最近ではメバル膳が有名になった北津軽郡中泊町です。

看護学校卒業後は東京の病院へ就職し混合内科に勤務。その後は青森県に戻り、弘前市で整形外科病棟に十六年勤務致しました。整形外科では多くの患者様が手術を目的とされていました。入院時には強い痛みで動けない患者様も、手術や治療で痛みが緩和され笑顔で退院される方が殆どであり、とてもやりがいを感じておりましたが、他の科や慢性期看護の勉強がしたいと思い、平成二十七年に国立病院機構青森病院に入職致しました。青森病院では神経内科病棟に二年、副看護師長として重症心身障がい児(者)病棟に三年間勤務させていただきました。重症心身障がい児(者)病棟では、人工呼吸器を使用されていらっしゃる方や言語的コミュニケーションが難しい方が多く、異常の早期発見ができるように、鋭い観察力が求められます。患者様の変化に気付くためには普段の患者様の状態を把握して

おくことの大切さや、先手の看護・患者中心の看護とは何かを学ばせていただきました。

今回、初めてハンセン病療養所の勤務となります。初めての異動・初めてのハンセン病療養所勤務ということで、何から準備すればいいのかわからず、あつという間に四月の異動を迎えてしました。

松丘保養園での一か月が過ぎ、研修や入所者の皆様とのかかわりの中で、国の間違った政策やハンセン病について学ばせて頂いている日々ですが、これまでの皆様が歩んでこられたハンセン病の歴史を含め、まだまだ知識も浅く、管理者としても未熟であります。そのため至らない事が多く、ご迷惑をおかけすることが多々あると思いますが、一日も早く新しい環境に慣れ、入所者の皆様の思いに寄り添い、入所者の皆様が安心・安全に日々を過ごすことができますように、微力ながら努めて参ります。よろしくお願い致します。

川西園長の退官に寄せて

一般社団法人ヒューマンライツふくおか 理事 藏 座 江 美

川西園長に最初にお会いしたのは、二〇一三年

に開催された成瀬豊追悼展を観に松丘保養園を訪れた時でした。成瀬豊さんは、熊本市現代美術館に勤務していた時に担当した、「ATTITUDE2007 人間の家 真に歓喜に値するもの」展への出品依頼のため二〇〇六年にお伺いした時に初めてお会いしました。

南鳩宏館長が先に成瀬さんご夫妻にご挨拶に行つております。私は事務的な手続きのために来園し、豊さん、テルさんと一緒にお茶を飲みながらいろいろとお話を聞かさせていただきました。その時に豊さんが菊池恵楓園に入所されていたことを知り、一気に距離が縮まったことを覚えていました。菊池恵楓園に入所されている吉山安彦さんとの思い出を、写真を見せていただきながらお聞き

したことはとてもいい思い出です。

そんな成瀬豊さんとの思い出話を川西園長にも追悼展の会場でお話ししました。初対面だったにも関わらず気さくにお話できたのは、川西園長がフレンドリーに対応してくださったからでもあります。成瀬豊さんの思い出を共有していくからだと思います。成瀬豊さんの多才な一面を丁寧に紹介されていた、素晴らしい追悼展でした。

川西園長との最初の出会いで忘れられない出来事があります。園長室に通されてすぐに「おなかすいてない?」と聞かれ、お昼を食べ損ねていたので、一緒に伺っていた同僚の男性と顔を見合せながら「すいています」と答えたら、にこにこしながら冷蔵庫からトウモロコシを取り出し

「はい」と手渡されました。緑の葉っぱもひげも立派なトウモロコシでした。が、明らかに生のトウモロコシで、同僚と顔を見合わせて「・・・」となり、何かの冗談かと思つていたら、「嶽きみといつてこ」れが旨いんや、食べてみて」と言われ、「本気だ」と意を決して緑の皮をむき生のトウモロコシを初めて口にしました。「！」その美味しかったこと！おなかがすいていたこともあり、二人でまるつと一本食べてしましました。生のトウモロコシを差し出された思い出は強烈に残り、今でも嶽きみは大好きな食べ物のベスト3に入っています。

成瀬テルさんには、豊さんの追悼展の時にもお会いすることができました。ベッドの中から、「その声は聞き覚えがある」とおっしゃつてくださいました。同僚は初めての訪問だったので、「その



川西前園長と嶽キミと……

声には聞き覚えがない」と、弱々しくなつてはいらつしやいましたが、意識はしつかりとされていて、ユーモアのあるいつものテルさんでした。時間にしてほんの五分程度でしたが、これがたぶんお会いできるのは最後になるのだろうなと思い、一生懸命大きな声でお声をかけて病室を出ました。その後半後テルさんも他界されたことをお聞きしました。その後、川西園長から、成瀬ご夫妻の遺品整理をしたいがご夫妻と関りのあつた蔵座さんにお願いしたい、合わせて、テルさんの願いでもあつた豊さんの画文集も制作したいので協力してくれないかとご連絡を受けました。

松丘保養園に成瀬さんご夫妻をお尋ねすると、居室で一緒にご飯を食



べたり、テルさんから「私は今から昼寝をするから、あなたもしなさい」と一緒にごろんと横になつていたら、介護員の方が来られて慌てて起き上がつたこと、「一緒に昼寝したら身内みたいなもんだ」と笑いあつたことなど、いつもあたたかく接していくくださつていたことが思い出され、お二人のために私になにかできることがあるのならなんでもやろうと、それから松丘保養園にお伺いして遺品整理や画文集の制作を始めることになりました。川西園長は日々のお忙しい業務の中、入所者の皆さんのが生きてきた証を少しでも残しておきたい、とお考えのようでした。プライベートな部分もあるので、「残す」という作業は簡単なものではなく、とてもデリケートな部分も含みますが、何も残せなければなかつたことになりかねないという危機感はとても共感できたので、写真の整理や聴き取りなどを行わせていただきました。

聴き取りには介護員の皆さんがチームを組んであたつてくださいました。日々のお仕事に加え、余計な作業が増えてお手間をおかけしたこと思います。短時間滞在するだけの私には入所者の皆

さんから聴き取りできるだけの関係性ができるないことに加え、方言が聴き取れなかつたこともあり、とても助けていただきました。

豊さんの画文集に関しては、『甲田の裾』のカット集が見つかることや、過去の記録をたどる作業を福祉室の石田さんにはとてもお世話になり、なんとか完成することができました。豊さん、テルさんが喜んでくださつてていることを願います。

各地の療養所でも、入所者の方の記憶を残していくことが急務だとされています。私は菊池恵楓園の絵画クラブ金陽会の作品の保存活動をやっていますが、ほとんどのメンバーが他界されている今、絵についての聴き取りをしていなかつたことをとても後悔しています。

松丘保養園では、川西園長のお声かけで入所者の皆さんへの聴き取りや思い出食堂などを開催さ



成瀬夫妻の思い出の写真

れていて、とてもいいことだなあと思つてきました。

た。あとはそれをどう残していくか、の作業だと
思います。私自身、途中になつている作業もたくさんあつて、きちんと形にしなくてはと改めて
思つています。

現在は、新型コロナウイルスの感染防止対策のため、各地の療養所に伺うことがままならない状況です。感染された方や医療従事者への心無い言動が報道されるたびに、私たちはハンセン病問題で何を学んできたのだろうと悲しくなつてしまいますが、各地の療養所で入所者の皆さんから学ばせてもらったことを、今、しつかり形に残して、これ以上同じ過ちを繰り返さないようにすることが、皆さんに出会つた者としての責任だと思つています。

川西園長のおかげで松丘保養園は私にとつてとても特別な場所になりました。ありがとうございます。これからも自分にできることで松丘保養園に恩返ししていきたいと思います。

藏座江美

(一般社団法人ヒューマンライツふくおか)



「成瀬豊追悼展」は2013年7月から9月まで開催された

Sさんのことなど

三 浦 康久

わたしが、松丘保養園と関わりを持つ機会を得たのは、行政で疾病対策を担当していたときでした。おかげさまで、園長さんや自治会の会長さんをはじめとする入所者の皆様との貴重な触れ合いを体験することができました。

これから当時の記憶をたどってみたいと思います。

わたしは、仕事であれ私生活であれ、その時々の身にも心にも刻まれた出来事は、できるだけ大切に温めておくことを信条にしていたつもりです。けれども、ふた昔という年月と、高齢ゆえのフレイル症状が起きかけていることから記憶が摩耗し、前後関係などに勘違いやら、うろ覚えがあるかもしませんが、できるだけ正確に閉じた記憶を掘り起こしてみたいと思います。

わたしが担当を受け持つたのは、国の政策が劇的に大転換した年でした。症状が完治してもなお強制的な隔離政策を改めようとしなかつた国が、誤りをようやく認めて公式に謝罪したのです。国に代わって、時の県知事が松丘保養園へ直接出向き、入所者の皆様へ、誤った国策のために、長い年月に渡つて受けた被害・痛苦などについて、お詫びすることになりました。詳しい日には失念しましたが、たぶん「ハンセン病を正しく理解する週間」中か、その前後だったかと思います。

余談になりますが、たまたまわたしの自宅が松丘保養園まで歩いて十分前後の場所にあり、子どもの

保養園内はいつも静かですが、この日ばかりは多くのマスコミが押し掛けました。

知事謝罪の場として、園側のお計らいで大きな会議室を用意してくれました。入所者が看護スタッフに付き添われて集まります。この日の下打合せのため、なんどかおじやましたときに出会った方々のお顔も見かけました。

ざわついていた会場は、知事の姿を認めると静まりました。知事は演壇の前に立つと深くお辞儀をしてから、整然と椅子に座っている入所者たちの姿を二度三度と見渡しています。心中どのような思いに駆られていたかは知る由もありません。知事が口を開きました。初めのうちは用意した原稿に添つて読み上げていましたが、ときおり言葉が途切れ気味になり、手にしていた原稿から目を離しアドリブが混じるようになりました。後ろで聴いていて、わたしが書いた拙い草稿を読み上げるよりは気持ちがこもっている気がしました。

それより、会場の入所者たちは、どのような思いで知事の言葉に聞き入つておられたか気掛かりでした。立ち上がりて抗議をする方が現われるのではないか、とわたしは内心危惧していました。

知事の謝罪が終わりました。拍手が起きたかどうかは記憶から消えています。わたしは会場を見回しました。さすが皆様、立派な社会人でした。心配はよけいな杞憂に終わりました。でも、入所者それぞれの胸には、形式的に近い数分の謝罪だけでは払拭できない、奥深い感情が激しく渦を巻いていたにちがいありません。

わたしは、職場に戻つてから考えました。入所者たちはいまさら抗議などをしてもどうにもなるものでない、という思いが強くあつたのではないだろうか、と至らない自分を恥じ入りました。

知事が謝罪したから、一世紀近くに渡つて被つた人生への被害は、「はいこれでおわり」で、済まさるものではありません。わたしの思いをスタッフに話すと、みなもうなずいています。引き続きいろいろな形で入所者との繋がりを保つていきながら、同じ社会に住む人間同士としてのお付き合いを進めるにはどうしたらいいか、などについて話し合いました。

まず当面、具体的に何をなすべきか。……スタッフの一人から発言がありました。折よく迫つているねぶた祭にご招待したらどうか、という案です。み

な手を叩きました。わたしもグッドアイディアだと
思い、知事の了承を得てから、園側に相談しました。
園長先生もご異存がなく、観覧を希望する入所者た
ちをねぶた祭にご招待する企画がとんとんと進みま
した。実現に当たっては、園側スタッフの方々の多
大なご協力がありました。感謝したいと思います。
入所者の皆様におかれましては、県内外から集まつ
た多くの見物客と混じつてのねぶた観覧は、いかが
だったでしょうか。

当時、入所者の皆様の置かれていた状況を考え
ると、例えはわるいかもしませんが、海水が住みよ
いか、淡水のほうが暮らしやすいか、とゆらゆら汽
水域（きすいいき）を行き惑う生活だったと思いま
す。ところが環境が一変して、ようやく水面に顔を
出すことができ、新鮮な空気を存分に吸いながら、
自分の意思で自由に泳ぎ回ることができるように
なったのです。そういう不安定な日常から抜け出し
た方々に、ねぶた祭以外にも、気持ちを癒せるお手
伝いができたかどうか、いまでも自信はありません。

それから間もなくして、Sさんという県外の療養
所に入所されている方から、施設を通して県へ連絡

がありました。

Sさんは津軽地方のT町のご出身だそうですが、
発症したとき自宅から遠く離れた療養所へ隔離され
たというのです。離れ離れになつた肉親と会うこと
もできないまま、歳月だけが過ぎていつたのです。
療養所から聞いた話ですが、Sさんはその間、故
郷のことは忘れようとしても、けつして忘れること
がなかつたそうです。ひとりの人間として当然の思
いでしよう。

けれどもSさんは、自らの置かれた立場と健康面
から、帰郷は一生叶えられない願いと諦めていたと
いいます。でも取り巻く環境が一変したいま、それ
までの想いが一気によみがえり膨らんだそうです。
療養所の説明では、Sさんは両目の光をほとんど
失い、会話もたどたどしく、日々の生活のほとんど
は車椅子に頼っているため、単身では帰郷が覚束な
いといいます。幸いに、日常生活をボランティアで
お世話をしている女性がいらつしやいました。療養所
から故郷までのすべての道のりを同行します、と申
し出してくれたそうで、みな安堵しました。

Sさんの主な希望は、ご両親が眠つている墓参り
をしたいことです。なんら難しい問題はありません。

お里帰りの当日、ボランティアさんに車椅子を押してもらう姿を空港ロビーに見たとき、わたしはすぐSさんだとわかりました。事前に、朱色のブレザーを着て緑色のネクタイを締めていくという連絡をもらっていたからです。後で聞いたのですが、朱色は赤い林檎の、緑色は林檎の葉つばのイメージのつもりだそうです。ボランティアさんのコーディネートか、Sさんのセンスかは、聞き漏らしました。

飛行機とはいへ療養所から乗り継ぎ時間も含めて、津軽路の旅は長丁場だつたと思いますが、Sさんの表情から疲れた感じは見られません。そこには、六十年前は片道乗車券しか持たされず療養所へ送られたのに對し、今回は堂々と往復の航空券を用意できたという感慨がこもっているのでは、とわたしなりに推量していました。

T町へ向かう前に、知事に面会する機会をつくれせてもらいました。県庁の玄関から知事室に入るまでの間、何台ものテレビカメラやマイクがSさんを取り囲みました。国が政策の誤りを認めた直後といふこともあり、事前にSさんの了解を得たうえで、〈Sさん、お里帰り〉のニュースを伝えていたからです。

Sさんは、戸惑つておられたようですが、ボランティアさんを介しながらも、取材に丁寧に応えてくださっています。その真摯な姿勢には、わたしも思わず胸が熱くなつたことを憶えています。

Sさんが知事室に入ると、椅子から立ち上がつた知事は車椅子に近づいて握手をし、両手を握りしだまま話し掛けました。

「お帰りなさい。長旅お疲れさまです。この日がくるまでどれだけ御苦労されたことか。申し訳ありませんでした」

Sさんは、出された林檎ジュースを、ボランティアさんの助けをかりて、ひと口飲みこむや、ぽつりと洩らしました。

「……ああ、うめえ」

「うめべ。のど渴いていたべ。津軽のジュースだや」と、知事が相槌を打つています。

ボランティアさんがそれを耳打ちすると、Sさんはうなずいています。

「吾の生まれ故郷の味だじや」

そういつて、細い葉脈を探るかのごとく、一言ひと言ルビを振るように唇をうごかしています。Sさんの故郷を想う気持ちが溢れていきました。

この後は、いよいよ諦めかけていたご両親との面会です。T町の墓地に向かうときのSさんの心中はいかばかりだったでしよう。

T町の役場が車を用意してくれました。今日から明日の空港まで、役場の職員がすべての行程を付き添ってくれるといいます。町長とも幼馴染みだそうで旧交を温める時間を持つことができました。町役場の配慮は、故郷の町に何十年ぶりかで帰つてくるSさんへの精一杯の敬意がこもつていると感じ、有り難く思いました。

Sさんを乗せた車は津軽路をゆつくり走ります。わたしの車も後ろを付いて行きます。やがて前方にお岩木様が見えてきました。Sさんの面影に残つてゐる姿といささかも変わつていなければ

お岩木様は、Sさんの帰郷を歓迎するかのように、じやまな雲々を風で吹き飛ばし、頂きから左右の稜線までの全貌を、陽光が眩しく照らしています。墓地に着いたとき、墓前にはすでに仏花や供物が用意されていました。そのことをボランティアさんがささやくと、Sさんは「うんうん」と、深くうなづいています。

ずり落ちるように車椅子から降りたSさんは、墓

の前で数珠を握つた両の手を合わせています。念佛を唱えているのでしよう、口元をしきりにうごかし、喉仏をふるわせています。父親や母親に久しくご無沙汰したことを詫びているのかもしれません。そして、両親の「お帰り」という肉声を、糸電話でもいいから聞こえてこないかと耳を澄ましていたにちがいありません。

時間はゆつたりと過ぎていきます。Sさんのお里帰りのスケジュールを制する人はいません。遠い過去からこの瞬間までの気の遠くなる時間を思うと、「そろそろ……」と言い出す者などいるはずがありません。

話は前後しますが、県庁の控室で待つてゐる間に、Sさんから四六判の詩集を頂戴しました。玉手箱の蓋をぱつと開けたように光が射した瞬間でした。ボランティアさんのお話では、〈Sさんの処女作〉だそうで、そのとき初めて詩人としても一家を成しておられる方だと知らされました。

詩集に『ひかりを飲む』という一編があります。

やわらかな春の日射しに手をひろげる

ひろげた手の中に日射しがいっぱい

渴いたのどに手の中のひかりを汲んで

腹いっぱいになるまで飲む

明るい陽光に照らされた行間には人生の暗さなど
みじんも感じられず、生命感に満ち溢れていて、読
む者の魂を震わせます。

『津軽の子守唄』に収載されている六十五編の詩
の一行一行には、Sさんの血反吐がほとばしるよう
な心魂（こころだま）が潜んでいる、叫んでいる、
と感じ取りました。脳裏には、いつも故郷の情景
が、例えば家族と過ごした団欒の日々などが積み重
なつていたにちがいありません。机に向かって黙考
しているうちに焦点が絞られ、ぱとりと雪が笹の葉
末から滴つた瞬間、文字となつて昇華するのでしょ
う。このたびの旅行のファンションも、この詩心か
らきていているのだと得心したしだいです。

Sさんが満願叶つて帰路の飛行機を待つ間、わた
しは思い切つてお尋ねしました。
「詩を書くときの言葉の泉つて、いつ湧き上がるの
ですか」

するとSさんは、ブレザーの内ポケットから小型

のメモ帳と水性ペンを取り出して見せました。
「なにか浮かぶと、忘れないうちにメモするよう指
示されるのです」

と、ボランティアさんが笑いながら代弁します。
飛行機に乗る時刻がきました。第二の故郷（とは
思いたくないかもしませんが）へ戻るSさんは、
わたしの気のせいかもしませんが、往路のときと
違い、寂し気な翳が浮かんでいました。でも、瞬き
をしてもういちど車椅子を見透かすと、その後ろ姿
はとてもなく崇高な光が輝いていると感じ取りま
した。

『津軽の子守唄』の〈あとがき〉に、Sさんは述
懐されています。

『……僚友たちは白杖を探り歩行している。だ
が足許の危険には怯えず、背後にある故郷への禍い
に心を運ぶのである。このことは勿論盲人のみなら
ず、五〇〇人余の入所者に共通している。』

この一文を記した一九八八（昭和六十三）年は、
国が頑なにらい予防法を守るべく自己主張し続けて
いた時期でした。家族たちをも含め、誤りをすべて
認めたのは、この年からまだ先のことでした。

ある日のこと、人を介して、Sさんのお手製だと
いう湯飲み茶碗が届きました。わたしが弘前大学へ
赴任した直後だつたかもしません。思いがけない
ことでした。茶色に焼き付けたこぶりな陶器で、五
本の指にちようど収まる大きさです。ためしに左の
掌に持ち替えると、手触りが昂じて、手乗り文鳥が
くちばしを開けて見つめているような錯覚を起こし
そうです。

Sさんは、詩の創作だけでなく焼き物も造られて
いたのです。趣味を通り越して芸術品です。土をこ
ねる作業をはじめ、焼き付けて完成品に至るまでの
過程には、大変な労力とご苦労があつたことでしょう。

松丘保養園をはじめ全国の療養所に入所されてい
る方々には、Sさんと同じように、文学や絵画、
書、音楽などの多彩な才能をお持ちの方がおられた
にちがいありません。苦しい人生行路を乗り越えて
きた経験が加わって、天分がさらに開花したこと
でしょう。そのほとんどが世に出ないまま封印された
と思えば、惜しまれてなりません。

社会の一線から退いたわたしには、時間がたつぶ
りあります。日々、湯飲み茶碗の縁に唇を触れ緑茶

を味わい、釉薬の熔けぐあいが絶妙な陶器の肌を慈
しんでいます。たまには、日本酒を注いで嗜む時も
あります（使い方が違うぞ、とSさんにお叱りをう
けるかもしれません）。

湯飲み茶碗を右手に、左手に詩集を開くひと時は
このうえない喜びです。一行一行を読み進めていく
うちに、一度しかお会いできなかつたにもかかわら
ず、在りし日のSさんの面影が浮かんできます。

それにしましても、松丘保養園と関わりを持つて
から二十年目というタイミングで、拙文を書かせて
戴く御縁に恵まれたことに、驚きもし有り難くも思
います。併せて、創刊九十年、通巻七百号という歴
史ある『甲田の裾』という機関誌に敬意を表します。

Sさんからの茶碗も詩集も手元にあるうちは、松
丘保養園と入所者の皆様との繋がりが途絶えること
はないでしよう。

（青森市石江字江渡在住。元青森県健康福祉部長、
元弘前大学副学長）

歩いている

木村全十

歩いている
 いつもの道を
 カラ松林ぞいの道
 子供達がかけていった
 歓声と一緒に
 かかるようには
 追憶に想い出達もかけて行く

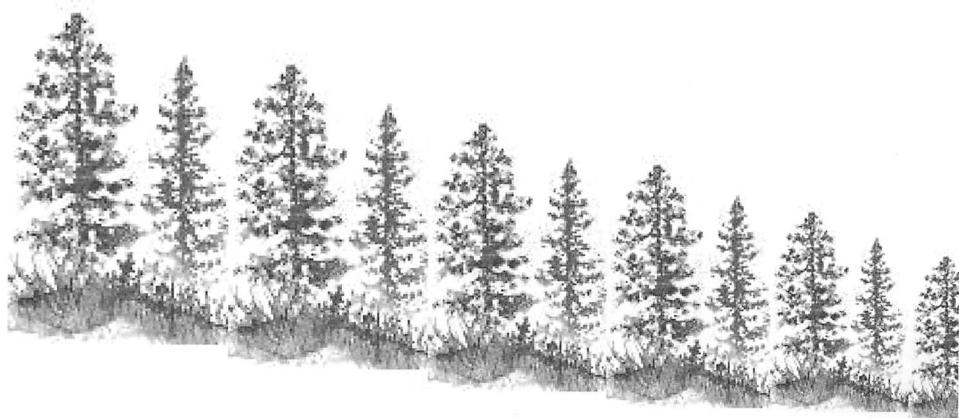
カラ松の梢が風にゆれて
 遙かな追憶に手を振つていて
 季節はいくつも通りすぎて
 僕はまだこゝにいる
 肩こゝを歩いている
 すばめ、老いを杖でささえながら



こゝはこの道はもしかして迷路なのだろうか

僕の中にまだ祈る神はない
道の向こうは霞んでいて
丘の上の森は沈黙したまゝ
幽かな鎮魂のやすらぎに包まれている

迷路もう少しでいい
道端に咲く名も知らぬ
小さな花たちのあいだなにをい
風がやさしくゆるやかだな
流れていから
道端に咲く名も知らぬ
小さな花たちのあいだなにをい



川柳・俳句

木村伯龍

川柳

お待ちどう 思い出食堂 開店す

津軽衆 謂る看護師 笑い皺

足腰の 衰え隠し ドッコイシヨ

ファンです ふたりのこうへいで盛りあがる

あれこれと 主語のない会話の 夫婦です

俳句

鯛を焼く 年に一度の大振舞

紅白に ついて行けない 老いの耳

車椅子 ナースに押されて 祭りの輪

雪掻きの 道具一式 出番なし

我が庭の 狹いながら 草紅葉

ひとが結ばれるということ

笠原俊典

私は京都にある緩和ケア病院で「チャップレン」という仕事をしています。今回、福西征子名誉園長先生から、機関誌「甲田の裾」への寄稿依頼をいただきましたので、拙筆ながら、想うところを述べさせていただきます。まず何より、「このお声かけは私にとってたいへんに嬉しいものでございました。先生とは

短期間でしたが、ご一緒に働く機会がありました。

ハンセン病療養所の医師として、ながく患者さんに携わってこられたこと、歴史の証人として差別や偏見に向き合つてこられたことが、その言葉の端々から感じられ、またユーモア溢れるお人柄は、この愚鈍にも響くところがありました。

ところでチャップレンという仕事は地域社会に馴染みがまだまだありません。私は寺の住職でもあります、病院では坊主らしいことを殆どしてません。

では何をしているのかというと、患者さんや家族さんと、毎日おはなしをして、病室の外に出て季節の移ろいを味わつたりしています。「何てのんびりした仕事なんや」と思う方もあると思いますが、豊かな仕事でもあります。

私は、お話をした患者さんたちから、いつもいつも宝物をいただいています。

患者さんは入院されたとき、すでに余命も限られていて、殆どの方はその事実を知つておられるのですが、最期のそのときまで、いのちを全うされます。

ある方は若い時から癌と闘い続け、「何で自分だけがこんな不幸な目に遭わなければいけないのか」と苦しんでおられましたが、当院に入院してから、ご

家族や友人の深い愛情に触れて、これまで知ることがなかつた沢山の「思い」に気付き、「私も幸せな人生だつたよ」と涙されたことがあります。

こうした経緯や患者さんの言葉は、私自身の歩みにとつて、大切な宝物となつています。

もちろんハッピーエンドだけではなく、最後までもがき苦しむ方もあれば、来られて挨拶も程ほどに亡くなれる方もありますが、これらすべての方々が私の心に宝物を遺していくくださいます。ただ、亡くなつた方々には何も恩返しきれませんので、その代わり、次に担当する患者さんに対して、何かをお返ししようと精一杯つとめるようにしています。

私たち歴史から一体何を学んだのでしょうか。

このウイルス感染の興味深いところは、現代的なエゴイズムに連鎖していて、「自分が他人にうつすことになつても厭わない」と思う人が街に出てウイルスを拡散させたり、病者が健常者から攻撃や差別を受けたり、さらに感染が原因で亡くなつた人の家族がその死に目にすら会うことができないなど、病気そのものの悲惨さだけでなく、人と人との分断するという副次的な、しかし、深刻な問題を抱えていることです。

さて最近は、新型コロナウイルスの話題ばかりでございます。お寺でも春の彼岸会は中止となり、それぞれのご家庭のご法事も延期されることが増えて

います。ご法事は行われても、その後の会席を取りやめにされることもございますし、さらに食事の際のお酌の返杯などは以ての外といった状況で、近い将来そういう習慣は失われて行くようにも思ひます。

さて最近は、新型コロナウイルスの話題ばかりでございます。お寺でも春の彼岸会は中止となり、それぞれのご家庭のご法事も延期されることが増えて

います。ご法事は行われても、その後の会席を取りやめにされることもございますし、さらに食事の際のお酌の返杯などは以ての外といった状況で、近い将来そういう習慣は失われて行くようにも思ひます。

自分自身にそうした性根があることを恥じています。

昨年、はじめて私は大島青松園に寄せていました。ご縁がありました（実は今年の初頭にも、福西先生から松丘保養園へのお誘いいただきましたが、生憎それは叶いませんでした）。

訪問して、まず驚かされたことは島が閑散としていて人影が殆どないことでした。それに島に一つだけあるお店は閉まっていました。

島の一角に、医療や福祉に携わる医師、看護師、介護員などのスタッフのための居住棟が整備されていましたが、スタッフは殆ど住んでおらず、高松市や庵治町などから通っているとのことでした。

かつて大島青松園には五〇〇名以上の患者さんや回復者の皆さんが暮らしていました。しかし、戦後、ハンセン病の薬ができる病気が治るようになると、徐々にその数は減少し、今では、居住棟や病棟で療養生活をしておられる方は、僅か五十数名に過ぎません。

この五十数名の方々の中には、ハンセン病の後遺症でお身体が不自由な方、老いによる認知症やう

つ病を発症した方、がんなどの合併症と闘つておられる方、さらに、これらの病を幾つも重ねて患つている重複重不自由の方もおられました。その一方で、花を植えたり、野菜を作つたりして元気に過ごしている方もおられ、療養生活は、単純に一括りにできるようなものではありませんでした。

日が暮れ始めた頃、島のいたるところで聞き覚えのあるオルゴールの寂しげな音色が大きな音量で流れています。

大島青松園は、この数年来、瀬戸内国際芸術祭に参加されています。これまで閉ざされてきた大島にアートが橋渡し役となつて、沢山の人々の来場があるとうかがいました。

入所者の皆さんは、「療養所の存在や歴史を知つてもらう機会ができてよかったです」、という思いと、「私たちがいなくなつても、この島が人の住む島であり続けて欲しい」、「そのためには私たちは力のある限り働き、生きる」という願いを持つておられました。

それらの、「思いと願い」、を語る言葉は、家族から引き裂かれ、ふるさとを奪われた人々が話されてい

るからこそその切実な重みがありました。

松丘保養園の機関誌「甲田の裾」二〇二〇年第一号に、環境デザイナー廣瀬俊介さんの文章に、石川勝夫入所者自治会長さんの、「園の将来を構想する中で敷地を『緑の森』として残し『地域貢献』を望むようになつた」という言葉を見つけました。私はお二方を存じ上げておりませんが、その言葉に、大島青松園の入所者の皆さんが語った言葉と同様の、過去から未来に向かた、「思いと願い」を感じることができました。

実は私は、ハワイに住んでいたことがあります。そのハワイにもハンセン病療養所がありました。海と絶壁に囲まれたモロカイ島のカラウパパ療養所で、一八六六年の創立以後、一〇三年後の一九六九年の隔離法廃止まで、約八〇〇〇人の患者さんが送られました。

一九八〇年に国立歴史公園となり、以後、ハンセン病の歴史を後世に残すべく歩みを始め（ハンセン病制圧活動サイトより）、現在は、「家族」や「ふるさと」ととの絆を回復するための取り組みが行われてい

ます。

有名なダミアン神父が患者さんと寝食を共にして、救済に尽くされたところでもあります。

かつてのカラウパパ療養所では、ハンセン病は、「分断する病」と呼ばれて、外部から隔絶され、社会との交流がありませんでした。そのため、そこで生きた患者さんに關する情報は僅かで、「ただ最後のときをここで暮らしていた」という記録しか残つてない人が少なくありません。

島民や支援者らによつて、「カラウパパ家族の会」が結成されてから、患者さんのお名前を刻んだ記念碑を建てたり、訪れた人々が当地の先人たちの軌跡を学ぶことができるようになるなど、さまざまな活動が行われるようになりました。

今回、私は、青松園の入所者の皆さんと触れあうことによつてカラウパパのことについて、あらためて、ひとが結ばれるとのことの有難さを知ることができました。ありがとうございました。

第十六回 思い出食堂

懐かしの『こびり』 笹餅とあつたか汁の郷土料理

看護助手 工 藤 幸 子

思い出食堂マスターの田沢忠さん監修の元、坪田タヨさん、青柳利子さんにご協力頂きました。

第十六回思い出食堂は令和元年十月二十五日に社会交流会館にて開催されました。秋も深まり里山の紅葉は落ち着き始めましたが、松丘保養園のもみじは真っ赤でまだまだ見頃。そろそろ温まるものを頂きたい季節になりました。

今回のメニューは津軽で食される「笹餅」、県南から岩手県北部に伝わる郷土料理「せんべい汁」、旬の野菜を使った「かぶの浅漬け」「かぶと菊のらつきよう酢漬け」。木村龍一様からのご厚意で差し入れの「食用ほおずき」を提供させて頂きました。



と柔らかく食べやすい「かぶと菊のらっきょう酢漬け」の二種類の味つけを作ります。二日間漬けたことで味もこなれておいしく出来ました。

前日から取り掛かった笹餅は田沢忠さんの懐かしの味で一つずつ笹で巻いているので持ち歩きしやすくいつでも何処でも小屋（おやつ）として食べていただこうです。餅を巻く笹も田沢さんが松丘保養園内で七月頃に摘み取り良く洗い水を切ったものを冷凍保存して頂いたものです。解凍した葉をザルに開けると色鮮やかな緑色で笹の瑞々しい香りがします。自然を思い起させいつまでも嗅いでいたい香りです。同じ大きさと虫食いのない綺麗な笹八十枚も採るのは大変だったと思います。皆さんにおいしいものを食べて頂きたいという田沢さんの思いに感謝しかありません。

中に包む餅はもち粉に砂糖、こしあん、塩を混ぜ水を加えて生地を作り、一個ずつアルミカツプに入れて蒸し器で二十分蒸します。田沢さんの皆さんによりおいしいものをとの思いに添つてもち粉は前日

にお米屋さんでひいた新鮮なもち粉を材料調達スタッフが用意していました。坪田タヨさんに手伝つて頂き、大きなボールからスプーンで丁寧に同じ分量になるように生地を入れ、完成させて下さいました。全て入れ終わつてからボールに残つた生地をペロリ「めえーな」とにつっこり笑顔を見せていました。うつすら小豆色のモチモチに蒸しあがつたお餅は冷ました後で笹に乗せ三角形に包んでいきます。



せんべい汁は鶏肉に酒を掛けサツと炒めごぼう、舞茸、人参、水を加えて煮込み醤油で味付けをします。ここでも坪田タヨさんが舞茸を小分けにしたり青柳利子さんは人参や長ネギを食べやすい大きさに切り、慣れた手つきで包丁を使うその素早さにスタッフも材料が追いかねないほどで、あつという間



に全て切つてしまふ姿はさすがのものでした。せんべいもちようどいい大きさに割つて頂きましたがかなり沢山の量にも関わらず、疲れた様子もなく、楽しそうに全て割つて頂きました。ところがここで鍋の味が中々決まり、あれを足そうこれを足そくかと皆で考え出し合いましたが、結局素材の味を失わせたくない思いで色々足すことはせずに、一晩様子を見るにしました。ドキドキです。心配でしたが、翌日に味の確認をすると、とてもいい出汁がでていてほつと安心しました。

当日に鍋にせんべいを入れ煮込んでみましたがお鍋用のせんべいのせいかななか柔らかくならず、かといって煮込みすぎると汁がドロドロになるのではと思い、別鍋にせんべいを移しお湯で温らせやや

柔らかくなつたものを出汁で煮る方法で煮汁も濁らずせんべいは柔らかに召し上がつて頂けるように工夫し、仕上げのネギを入れるとさらに味は決まり皆で喜びました。問題解決のアイデアを出し合い作り上げて入所者の皆さんに美味しいもの提供したいとう田沢店長はじめスタッフの連携に感動を覚えます。

その後会場のセッティングや飾りつけを済ませ、各テーブルに木村龍一様より差し入れて頂いた「食用ほおづき」を盛り付けました。イギリスでは食材としてメジャーなものですが日本ではまだ珍しい甘さと酸味が効いたミニトマトのようなおいしい果実です。

これで『思い出食堂』のスタートです。開始時間になりましたが入浴日などと重なつたせいが出足は遅く、始めはゆつたりと過ごして頂きました。笹餅は「甘さも丁度よくもちつとしてとても美味しかつた」「もう一個リクエストしたいほど美味しかつた」とのお声を頂きました。普段は制限され、お餅を頂けない入所者様にもSTT指導の下、食べやすい

大きさに切り食して頂いたところとても美味しい、来て良かったたとおつしやつて頂きました。

岩手県出身の入所者様は「せんべいの入れる頃合い難しいのに良くできている。ずいぶん頑張ったな」とコメントして頂きました。

「どれも美味しい。珍しいほおずきも呼ばれて来てよかったです」と他入所者と楽しそうに声を掛けられ、楽しそうに微笑んでいる様子に安堵しました。できましたら仕込みの段階でもっと入所者様にご参加頂き、色々教えて頂きながら一緒に作り上げていけたらより楽しい本当の意味での思い出食堂になるのではないかと思います。次回はもっと多くの入所者様からアイデアを頂けること願っています。



ごちそうさまでした！

◆社会交流会館だより◆

カレーの味は 甘口？辛口？それとも濃口？

社会交流会館 学芸員 澤 田 大 介

みなさん、こんにちは！

新型コロナウイルスの流行もあって、日曜日が折角の五月晴れでも、「今日は街までショッピング♪」ともいかず、しばらくは自粛日々の毎日。どうしても息苦しくなりがちな今日この頃ですが、少しでも流行の終息を早めるために、一人ひとりの心掛けが大切な時期ですね。

そういえば昨年は、ラグビーワールドカップと空前のラグビーブーム。当時のOne for All, All for Oneの精神よろしく、新型ウイルスにも、また日本が一丸となつて取り組む必要がありそうです。

当の自分はといいますと、いつも洗濯物を乾かすためコインランドリーを使っているのを、自粛して部屋干しにしていました。本当は出かけるのが億劫だったただけのですが案の定、シーツや布団カバー

は生乾きで、夜寝るときはその「におい」で息苦しい、いえ寝苦しい今日この頃です。

「におい」で思い出しましたが、新型コロナウイルス感染症の症状として「味覚・嗅覚障害」があるそうです（ただ一般の風邪にも共通する症状だそうで、あくまでも一症状にすぎないそうですね）。ある芸能人が、自分の味覚・嗅覚のチエックとしてカレーを作つたという記事を読んだので、自分も久しぶりにカレーを作つて食べたことがありました。特別、疑わしい症状があつた、というわけではないのですが。

「カレーから味がしない・・・」

確かにかつて、味のしないカレーを作つたことは、一度や二度のことではないです。その時は、小麦粉とカレー粉を使った、まさしくルーから作るカ

レーだったわけで、どうして味がしないかは大方予想が付いたものでした。ただ今回は、具材と一緒に煮るだけのいわゆるルーから作るカレー。このとき原因として頭をよぎったのは、「感染」の二文字でした。

恐る恐る手を伸ばすのは、レシートをため込んだお財布。とりあえず、ここ最近の行動履歴を確かめようとして見てみると、出てくるのはどれも、歩いて数分のスーパーやコンビニのレシートばかり。己の行動範囲の狭さもと、徹底された自肃生活がそこに存在するだけでした。友人と外食をした形跡もありませんが、それは一ヶ月も前。結局、その日のうちに原因はわからず、思い当たるものもありませんでした。

「病は気から」という言葉があります。本来の意味は病気の重さは気の持ちよう、といったものです。が、この言葉の意味を広げると、とりわけ感染症について言えば、病は体よりも先に心に感染する、と言えるのかもしれません。

あの時の自分は、ウイルスへの警戒心が強いばかりに、要らぬ妄想をしてしまいました。警戒心が強いて超したことはありません。しかし、警戒心ゆえの妄想が他人にも及ぶようになつたら注意が必要です。様々な情報が蔓延し、ウイルスより人間のほうが怖いという言われ方のする現状、自分の行動を今一度見直すことが大切です。もしかしたらそれは、カレーのルー一粒の問題かもしれません。

なんだか話を大袈裟にし過ぎたきらいがありますが、身体にするマスクだけでは無く、心にもマスクを忘れないようにしたいです。

「カレーから味がしない・・・」

いつも通りであれば「ルーを足せばいいか」で済んだのでしょうか。今思えば、「初めて使う銘柄のルー

人事異動

【昇任】

園長 横山慎（当園副園長より）

副看護師長 石田真紀子

【採用】

《定員内職員》

内科医師

梅村孝太郎

（八戸市立市民病院より）

外科医師

土橋雅樹

（八戸市立市民病院より）

外科医師
医事係長

滝川哲弘

（医療法人白生会胃腸病院より）
（弘前大学附属病院より）

（国立病院機構函館病院より）
看護師長 佐野美香

（国立病院機構青森病院より）
看護助手 吉田安寿

（賃金職員より 中央1階勤務）

《再任用》

調理師 尾崎純造

自動車運転手 吉田寿

洗濯長等職員 柿崎昭彦

准看護師 坂井いつ子

義肢工 中村輝彦

事務助手 石田史子（福祉室勤務）

（以上令和2年4月1日付）

事務助手 木下直実（福祉室勤務）

（以上令和2年4月13日付）

自治会日誌

○印 園関係

三月中

6日 第7回執行委員会

平成31年度（令和元年度）国費予算説明

10日

環境デザイナー（風土形成事務所）廣瀬俊

12日

介氏、人間文化研究機構国文学研究資料館

13日

西村慎太郎氏来訪（グランドデザインと資

14日

料保存について）

15日

甲田の裾編集局企画運営会議

16日

除雪作業員 作業終了の挨拶に來訪

17日

第8回執行委員会

18日

東谷商店との売店契約

19日

青森地方法務局 横二葉局長 離任の挨拶

20日

○さくら保育園卒園式

21日

○辞令交付

22日 第9回執行委員会

四月中

1日

4／1付昇任、転任、採用職員7名 挨拶

2日

に來訪

3日

○印 園関係

編集後記

◇新型コロナウイルス感染拡大は私たちの生活スタイルを一変させた。何よりも短日で命を奪う感染症であることを学んだ。そんな中で、自らの命の危険を顧みず懸命に頑張る医師・看護師に対し「差別」という活字が見られるようになり、私達が歩んだ辛い歴史が繰り返されるような気がしてならない。

感染者の治療に懸命にあたっている医療従事者への差別偏見は言語道断。自分さえよければ、という身勝手さ、他者を思いやる心は微塵も見られない。残念でならない。

（佐藤 勝）

7日

青森地方法務局 佐藤毅局長、木下昌彦人
権擁護課長、挨拶に來訪

9日

○職員健康診断
4／13付採用職員1名 挨拶に來訪

10日

企画運営会議
13日

第4四半期自治会会計業務監査
15日

○職員健康診断
27日

甲田の裾編集局企画運営会議
28日



松丘保養園の今年の桜



観桜会等、園内のイベントは中止となりましたが今年も松丘の桜は美しく咲きました。



国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で111年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地
園長 横山慎
保有敷地
建て面積
延べ面積

青森市大字石江字平山十九
一三七、九六六平方米
(七二、一一〇坪)
二三、八一二平方米
(七、二一六坪)
二九、四七三平方米
(八、九三一坪)

交通案内

電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車
(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車
(車で約5分)

バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行
弘南バス浪岡・五所川原・黒石
行き 共に松丘保養園前下車

航空機の便

青森空港より (車で約30分)

高速自動車道の便

青森ICより (車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三
内雲園 (1 km) と国の特別史蹟指
定の三内丸山繩文遺跡や県立美術
館 (2 km) 等があります。

発行所

一般財団法人 松丘保養園松桜会

所在地

〒〇三八一〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話 (017) (788) 〇一四五・〇一四六

発行人 横山慎

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一―十六

青森オフセット印刷株式会社

電話 (017) (775) 一四三一番